

— 告 告 —



竹林 文夫 (たけぼやし ふみお)

金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
千葉県 市原中央高等学校出身

『漂流』の外房の土性骨と人間力で社会へ。

選んだのだ。

小さい頃からJリーグ、ジェフユナイテッド千葉が身近にあり、サッカーに熱を上げた。身長一八五センチ、高校時代まで不動のゴールキーパーだった竹林さんは、進学後、勉強へとギアを切り替え、現在、岡田豪准教授の指導のもと、放射線の検知や線量計測などに使われるラジオフォトルミネセンス

出身が黒潮洗う千葉県外房の田舎と聞き、勝手に想像した私が悪かった。対面した竹林さんは都会風のスマートな印象で、磯の香も土のおいもうかがえなかった。

「バイオ関係の研究職だった両親の影響もあり、子どもの頃から化学が好きでした」。その両親から大がかりな学ランキングなどで高い評価を受けるKITを薦められ、進学先に

(RPL)の研究に取り組んでいる。

まだまだ未知の現象であるRPLを解明するため、岡田研究室では候補となる微量の希土類元素をホスト材に添加してセラミックを作り、RPL特性の有無を一つひとつ調べている。具体的には、セラミック化した試料に放射線、続いて紫外線を照射し、RPL特有の蛍光現象の出現や蛍光強度の測定を行う。

概要を聞いただけでも、相当に根拠のいることが分かる。竹林さんも、一定の成果を得るまで時間がかかると、研究室配属と同時に大学院進学を決めた。クールな見た目とは異なる、ブレない強い意志を垣間見た気がした。

そんな彼の真摯さと実力を証明するのが、さまざまな学会での発表だ。受賞歴は五度に及び、今年一月には応用物理学会の査読付き国際学術誌に、執筆した論文が掲載

された。

入学後から読書始めた。海洋文学の傑作と言われる吉村昭の『漂流』が、特に心に残るといって江戸後期、しげで無人島に流れ着いた土佐の船乗りが、十二年に及ぶ悪戦苦闘の末、仲間と協力し合っって生還した史実に基づく長編小説だ。孤独感や絶望感に打ち勝つ精神力、生き延びる知恵と行動力の大切さが迫力ある筆致で迫ってきたと話す。

京セラから内定をもらった竹林さん。岡田先生は「チームワークで活躍できる人になってほしい」とエールを送る。無責任かもしれないが、それに「大丈夫」と太鼓判を押す私がいる。外房の土性骨をしかと体内に宿し、『漂流』から読み取った「生きる力」を実践していくと確信するからである。

金沢工業大学
石川県野々市市市原が丘七七一
電話番号 〇七六二四八二〇〇〇

KIT
キャンペーン
レポート
文・杉村裕之